別冊

取りはずしてご使用ください。

ひとつずつ すこしずつ

ホントにわかる

中1からの国語

文章読解

答えと解説

新興出版社 shinko publishing

1 指示語に着目しよう

例題

本文 p.7

ものを作るプロセスは、自由である。結果として、早く正確なものができればよい。それを作るプロセスでは、個性を発揮することができる。無個性なものを作るためにも、個性が大事だから、職人だといえる。

職人とは、ものを作る手だてを考え、道具を工夫する人のことである。

それをしないで、与えられた道具を使って、教えられた通りの方法でものを作る人は、単なる労働者にすぎない。

（小関智弘『ものづくりに生きる』より）

答え

① ② 上記参照

③ ものを作る

考え方

② 「それ」の代わりに入るか確かめます。

③ 職人は「ものを作る手だてを考え、道具を工夫する」のですが、「それ」をせずただ与えられた通りにものを作る人は、「単なる労働者」だと書かれています。

2 接続語を知ろう

例題

本文 p.9

世界は今、いわゆる〝クールジャパン〟に注目している。

□「ドラゴンボール」や「スラムダンク」が外国人には喜ばれたり、驚かれたりしている。

その様子を見て、昔から慣れ親しんできた私たちは、ある種の〝余裕〟を感じることができる。

では、同じような余裕を、歌舞伎や能や禅について感じることができるだろうか。これらを好きな外国人のほうが、一般の日本人よりよほど詳しかったりする。これは非常に寂しい現状だ。

（齋藤孝『由緒正しい日本の教養　俳句・禅・茶の湯・歌舞伎・能』より）

答え

① 上図参照

② ア

考え方

① 漫画が例として挙げられています。

② 世界でクールジャパンが注目されていることの例として、「スラムダンク」などの日本の漫画が、外国人に受け入れられていることが書かれています。

といてわかる①

〜…この文章でおさえておきたい部分

□…文章の展開をたどる手がかり

「つまり」は、そこまでで書かれていることを言い換えたり説明したりするときに使われます。ここでは、

本文 p.10〜11

「框」というのはもともと、いろいろな物の外枠の木のことをいうらしい。であるから、玄関の上がり框は、段差があるためにむき出しになっている側面と端とを、木の枠でカバーしたその部分のことをいう。

日本の住宅はつまり、地面と床とにかなりの段差があったわけだ。①これは、日本の気候風土と関係があるだろう。

(1)

答え 地面と床とにかなりの段差があった

筆者がどんなことについて「日本の気候風土と関係があるだろう」と述べているのかを読み取ります。指示語「これ」より前の部分を確認すると、

「『框』という言葉は『床框』という場合にも使われる。」という文を受けて、「床框」について説明しているのです。

「これ」は、――線②を含む段落で書かれている、外からやってきた人が、上がり框にちょっと座り、家の人とさまざまなおしゃべりをする、という訪問形態を指しています。

「その」は、『訪問』と『伝言』の」という内容を指しています。

住環境学者の沢田知子は「家に上がる」「お上がりください」という言葉の中に、日本人の境界感覚を見た。家には入るのではなく、上がるのである。一段高いところに上がるために靴を脱ぐという行為があり、靴を脱いだ先には境界を超えて別の世界がある。

「框」という言葉は「床框」という場合にも使われる。つまり、床の間を作るときにその幅に横木を入れて、板の間や畳からさらに一段高くするのである。これは「床」という言葉が示すように寝場所であり、貴人の座る場所であり、そして、座敷飾りの場であった。寝場所であった場合、人はこんどは着物を脱いで、その高い場所に上がった。

□、私が関心を持っているのは、その上がり框に、外からやってきた人がちょっと座る、という行動である。これは私が生まれた家でも日常茶飯事で、近所の人はたいてい、よほどのことがないと家には上がらないし、かといって玄関先で立ったまま用事を伝えて帰るというわけでもなく、②用を足すためにやってきて、上がり框に腰掛けた。そしてそこで、用事以外のさまざまなおしゃべりが始まるのである。

これは「訪問」でもなく「伝言」でもなく、そのあいだの関係だ。（中略）「上がり框関係」では、訪れた者も迎えた者もその場に座ることができるが、今の中途半端な洋風住宅では、玄関の板の間は座るには低すぎ、立ちながらしゃべるのは苦痛だ。そればかりでなく、相手よりやや高いところに立ち続けることが、相手によっては甚だ失礼であるように感じられ、自分だけ床に座ってしまうこともある。そうすると、相手は玄関に座るわけにはいかないから、相当な視線の段差ができる。はなはだ不都合だ。

上がり框は、訪問者と迎える者とが、同じ目線の高さで話すことのできる、ちょうどいい半端な訪問形態なのである。

（田中優子『未来のための江戸学―この国のカタチをどう作るのか』より）

直前に「地面と床とにかなりの段差があった」が見つかります。

(2) 答え ウ

前は床框についての説明、あとは上がり框にちょっと腰掛けて、家の人とおしゃべりをするという訪問形態について書かれています。前後で話題が変わっているので、転換の接続語が入ります。

(3) 答え イ

「上がり框」に注意しながら最後まで読むと、「上がり框」にちょっと腰掛けて、家の人とおしゃべりするという訪問形態は、「訪問者と迎える者とが、同じ目線の高さで話すことのできる、ちょうどいい半端な訪問形態」だという筆者の考えが書かれている部分が見つかります。

3 主語と述語を探そう

例題

本文 p.13

これがあれば幸せになれると言われているものや、自分に欠けていると思うものを手に入れても、また次なる何かが欲しくなるだけです。それを続けている限り、①幸せはいつもちょっと先にあり続ける。しかし、足るを知ったあなたは、もう鼻先にぶら下げられた人参を追う馬ではありません。②あなたは今自分が手にしているもののなかにある喜びを、積極的に見いだしていけるようになるはずです。

（加賀乙彦『不幸な国の幸福論』より）

答え

①②　上記参照

③　足るを知ったあなた

考え方

②「見いだしていけるようになる」のは「あなた」です。

③「幸せはいつもちょっと先にあり続ける」人と比べ、――線②のような人はどのような人かを考えます。

4 言葉の力をつけよう

例題

本文 p.15

思考や知識の整理というと、重要なものを残し、そうでないものを、廃棄する量的処理のことを想像しがちである。もちろん、そういう整理もあるけれども、それは、古い新聞、古い雑誌を、置場に困るようになったからというので、一部の入用なもの以外は処分してしまうのに似ている。物理的である。

本当の整理はそういうものではない。

第一次的思考をより高い抽象性へ高める質的変化である。

（外山滋比古『思考の整理学』より）

答え

①②　上記参照

③　ア

考え方

①　筆者が「本当の整理」とはどのようなものだと思うかを説明しています。

②「抽象（ちゅうしょう）」の対義語は「具体」です。

③　最終段落の「抽象性へ高める」に着目し、「抽象」の意味から考えましょう。

辞書を積極的に利用して、知っている言葉を増やしていこう。知らない言葉の意味を、前後の内容から推測する力も大切だよ。

5 強調された言葉を見つけよう

例題

本文 p.17

人間の心のエネルギーは、多くの「鉱脈」のなかに埋もれていて、新しい鉱脈を掘り当てると、これまでとは異なるエネルギーが供給されてくるようである。このような新しい鉱脈を掘り当てることなく、「手持ち」のエネルギーだけに頼ろうとするときは、確かに、それを何かに使用すると、その分だけどこかで節約しなければならない、という感じになるようである。

（河合隼雄『こころの処方箋』より）

答え

①②③ 上記参照

④ a 鉱脈

b エネルギー

考え方

②③ 「エネルギー」「鉱脈」が繰（く）り返されています。

④ 人間の心のエネルギーは鉱脈に埋（う）もれていて、この鉱脈を見つけることで、新たなエネルギーを得られるとあります。

6 「とは」が出てきたら

例題

本文 p.19

文章の構築方法として「起承転結」ということがよく言われるが、それに縛られてしまうと書けなくなる。「起」から考えて、次に「承」に行って、「転」というふうに構築しようとすると、頭が硬直して書けなくなる。

「起承転結」とは、四つが均等のものではなく、実は「転」があるかないかにすべてがかかっている。考える順番でいえば、「転」が最初。つまり、「転承起結」なのだ。

（齋藤孝『原稿用紙10枚を書く力』より）

答え

①② 上記参照

③ ウ

考え方

② 「とは」の前後で、言葉が言い換（か）えられています。

③ 「とは」に着目します。ここで、「起承転結」は「実は『転』があるかないかにすべてがかかっている」と説明されています。

文章の中心的な内容をつかむためには、強調された言葉や「とは」を用いてくわしく説明されている言葉に注目するといいよ。

といてわかる②

□…文章の展開をたどる手がかり
～…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

「あいまいさ」という言葉が「　」でくくられて**強調されています**。

「融通のきかぬ」に傍点が付けられて**強調されています**。「融通がきかない」とは、「その場に応じた自在な処置ができない」という意味です。

「とは」という表現が出てきたら、必ずそこに着目しましょう。ここでは、「科学的な思考」「あいまいさ」について、それぞれどのようなものであるかが説明されています。

「多義的」「融通無碍」という**難しい言葉**が出てきています。こういった難

本文 p.20～21

「ちょっと右」といわれて、「その〝ちょっと〟とは、厳密に言って、何メートルですか」などと反問する人はいまい。仮に、そう反問されても、「一・二メートルだよ」などと答えられる人もいないだろう。お互いに「ちょっと」で、充分用が足りているのである。

ところが、機械にそう要求しても、機械は相手の意を察して、〝適当に〟、ものごとを処理してくれはしない。あくまで正確に、「何グラム」とか、「何度」とか、「何メートル」とか、指定しなければ作動しない。①ファジー理論は、そうした融通のきかぬ機械に「あいまいさ」を組み込んで、機械のほうを人間に近づけようとする試みなのである。

むろん、機械に、そのような性格を与えることは、けっして容易ではない。ロボットに「やや左」とか、「ほんの少し前」などと命令して、ロボットが命令者の意をくみ、そのとおりに動くような仕組みをつくるのは、きわめて困難なことだろう。なぜなら、そのためには、ロボットを人間並みの頭脳につくりあげねばならないからである。そう考えると、人間の持っている「あいまいさ」は、もっとも人間的な特質であって、機械には簡単に真似できない特質、ともいえよう。

正確さというのは、真か偽かを、はっきりさせることである。真であり、同時に偽である、などということは許されない。つまり、②科学的な思考とは、イエスかノーか、コンピューター言語でいうなら、1か0か、という二値論理ですべてを割り切ることの上に成立している。

それに対して、「あいまいさ」とは、多義的であるがゆえに、イエスでもあり、ノーでもある、という場合が充分おこ

(1)
——線①は主語の部分に引かれています。主語の性質や、状態を説明するのが述語なので、述語を確認しましょう。「ファジー理論」とは「機械のほうを人間に近づけようとする試み」であると説明されていることがわかります。

答え　機械のほ～する試み

(2)
——線②の直後に「とは」があるのに着目しましょう。そのあとに続く「イエスかノーか～成立している」の意味をおさえ、それに合う選択肢を選びます。

答え　イ

(3)
——線③は述語にあたる部分の一部なので、主語を探します。この一文の主語は「それは」です。そこで、「そ

答え　イエスでもあり、ノーでもある、という場合が充分おこりうる

しい言葉の意味を理解することは、読み取りのうえで大変重要です。なお、「多義的」とは、多くの意味をもっているさまのこと、「融通無碍」とは、考え方や行動などが自由でのびのびとしているさまのことです。

りうる。それは、二値的な立場からすれば、明らかに③矛盾であろう。しかし、現実は、そのような矛盾に満ち満ちているのである。そうした矛盾を巧みにすり抜けていく能力を「融通無碍」とみるなら、あいまいな言葉を平気で使ってきた日本人は、むしろ、現実に器用に順応してきた民族ともいえまいか。

（森本哲郎『日本語　根ほり葉ほり』より）

れ」という指示語の指す内容をおさえましょう。この指示語は、直前の一文にある「イエスでもあり、ノーでもある、という場合が充分（じゅうぶん）おこりうる」という、「あいまいさ」の説明を指しています。

7 言い換えを読み取ろう

例題

本文 p.23

プロの作家の多くは、構築作業をしてから書きはじめる。ましてや書くことに慣れていない人がいきなり書きはじめて、ちゃんとしたものが書けるなどと思っているなら大間違いである。

書くことは、無から有を生み出すことではなく、頭の中で構想したものを形にしていくこと、すなわち構築することなのだ。

（齋藤孝『原稿用紙10枚を書く力』より）

答え

①② 上記参照

③ 構築すること

考え方

② 「つまり」なども同じ意味を表す接続語です。

③ 「書くこと」について、「頭の中で構想したものを形にしていくこと」という説明を「すなわち」という接続語を用いて言い換（か）えています。

言い換えの接続語を使って、くわしく説明している言葉は、筆者が読者に「特に注目してほしい」と考えている、大切な内容だよ。気をつけて読み取ろう。

⑧ 比べているものを読み取ろう

例題

本文 p.25

（この文章は、〝忘れること〟の大切さを述べている。）

昔の人は、自然に従った生活をしていたから、神の与え給うた忘却作用である睡眠だけで、充分、頭の掃除ができた。ところが、いまの人間は、情報過多といわれる社会に生きている。どうしても不必要なものが、頭にたまりやすい。夜のレム睡眠くらいでは、処理できないものが残る。これをそのままにしておけば、だんだん頭の中が混乱し、常時、「忙しい」状態になる。ノイローゼなども、そういう原因から起こる。

（外山滋比古『思考の整理学』より）

答え

① ② 上記参照

③ ウ

考え方

① 「ところが」で結ばれた前と後の内容に注目します。

② 「昔」と「いま」を比べています。

③ ア・イ・エの内容は、いずれも「いまの人間」についての説明、ウのみ「昔の人」の説明です。

筆者は「いまの人間」の特徴についてわかりやすく説明するために、まず「昔の人間」について述べているんだね。

といてわかる③

…この文章でおさえておきたい部分

…この文章で強調されている言葉

…「逆接」の言葉

「しかし」の前後で、「速読」と「スロー・リーディング」を比較していま

本文 p.26～27

速読は、読書を読み終わった時点で終わらせてしまう読み方である。①しかし、スロー・リーディングは、読書を読後に生かすための読み方である。

ザッと目を通したという程度では、人と語り合う際にも、曖昧で、どことなく自信なさそうな語り口となってしまう。相手に話をふられても、「うん、ちゃんと読んでないんだけど……」だとか、「細かいところは、覚えてないんだけど……」などと、②不本意な言い訳をしなければならなかったとい

(1)

答え 自分だっ～動するか

――線①を含む一文は「スロー・リーディング」について述べています。この「スロー・リーディング」という言葉は文章中に何度も登場しているので、この言葉が出てくるところに着目

す。この比較をおさえると、筆者は「速読」に否定的で、「スロー・リーディング」に利点があると考えていることがわかります。

「スロー・リーディング」という言葉は、**本文中で繰り返されて強調されています。**

う経験は誰にでもあるのではないだろうか？　そうすると、相手は、この人は、本を読んでも、何も感じない、自分の意見一つ満足に持てない人なのだと見なしてしまうものだ。普段、よく会話をする友達ならともかく、初めて会う人は、そうした言動から相手を判断するしかないのである。

　見方を変えれば、読書は、コミュニケーションのための準備である。自分の考えをうまく人に伝えられないと悩む人は多いが、いきなり人前に出て、考えてもみなかった事態に対して、何か意見を言ってくれと言われても、難しいのは当然である。読書は、そうした現実に備えて、様々な状況を仮想的に体験させてくれる。そして、スロー・リーディングを通じて、そうした中で、自分だったら、どう感じ、どう行動するかをじっくりと時間をかけて考えておけば、思いがけない事態に直面したときにも、気負わず、普段、考えている通りのことを言えばいいのである。

　一冊の本を読むという体験は、誰にとっても同じものではない。独善的にならず、まずは作者の意図を正確に理解し、その上で、自分なりの考えをしっかりと巡らせることができれば、読書はその人だけの個性的な体験となる。③スロー・リーディングは、個性的な読書のために不可欠な技術である。

（平野啓一郎『本の読み方　スロー・リーディングの実践』より）

しながら、――線①の内容について、くわしく説明している部分を探すと、第三段落の真ん中あたりに、「スロー・リーディングを通じて、～いいのである」とあるのが見つかります。

(2)

――線②は「ザッと目を通したという程度」で読んだ時について書かれている部分です。「ザッと目を通したという程度」は、「速読」を言い換えている表現です。

答え　速読

(3)

――線③を含む一文に着目すると、「個性的な読書」に必要なのは「スロー・リーディング」だとわかります。また、――線③の「個性的」という言葉が、一行前にも用いられているのをおさえます。この段落に着目し、どのように「スロー・リーディング」をすれば、「個性的な読書」ができるのかを読み取りましょう。

答え
a　作者の意図
b　自分なりの考えをしっかりと巡らせる

9 段落を読み取ろう

例題

本文 p.29

アイディアはいつ、どこで、突然、飛び出してくるか知れない。そして、あっというまにまたどこかへ雲がくれしてしまう。ちょうど珍しいチョウチョウのようなものである。一度、逃してしまったら、いくら、あとで地団駄ふんでみても、あとの祭り、どうすることもできない。

そのために、あらわれたら、すかさずとらえてしまう捕虫網を用意しておく必要がある。アイディアの狩人はたいていメモ用紙を用意している。

（外山滋比古『アイディアのレッスン』より）

答え

① 上記参照

② アイディア

考え方

① 「チョウチョウ」は、筆者の言いたいことを説明するための具体例です。

② 二つ目の段落では、アイディアを逃（のが）さないために、準備することの大切さについて書かれています。

「……必要がある。」という一文に、筆者が最も伝えたいことがまとめられている。これが、段落の要点であり、この文章の要点でもあるんだよ。

といてわかる④

…この文章でおさえておきたい部分

…この文章で強調されている言葉

…「逆接」の言葉

本文 p.30～31

地球上の環境は充分に容積が大きいから、人間ごときが何をしようとびくともするはずがないというのが、長い間の常識だった。また、あらゆる問題は、いずれは科学技術つまり自然科学を応用した技術の力によって解決できるだろうと、無邪気に信仰している人が圧倒的に多かった。いや、今でもまだ大多数の人はそう信じているのかもしれない。

だが、最近では、無限に近いほど巨大だったはずの地球は意外に狭く、無限の復元力があると信じられていた地球上の

最初の段落の内容に着目します。「また」という接続語で、「地球上の環（かん）

(1)

答え a 無限の復 b 自然科学

第一段落と、第二段落の要点から考えます。第一段落の内容と対応するのは、問いの文の一文目です。aには、「人間ごときが何をしようとびくとも

境は～常識だった」「あらゆる問題は～圧倒的に多かった」という内容が並列して書かれていることをおさえましょう。

接続語「だが」を用いて、「地球は意外に狭く」「ひとたび大きく～回復しない」という第一段落と反対の内容が書かれています。

第一～三段落の内容をふまえ、「万能のはずだった科学技術」が、現在では「地球規模での異常を起こす元凶になるのではないかと恐れる人が増えている」のだと書かれています。

第五段落を受け、今の便利な生活は、人類の歴史の中では、ごく短い間のことなのだと説明しています。

人類は、便利な生活を手に入れたかわりに、「膨大なエネルギーを消費し、生活環境を大きく変えつつある」と述べ、文章全体をまとめています。

環境も予想以上に繊細で、ひとたび大きく傷つけば容易に回復しないことがわかってきた。

われわれも、ミクロコスモスに生きているのだ。

万能のはずだった科学技術も、規模が大きくなるにつれて、いろいろな問題が解決できる一方で、①新しい問題やトラブルを生み出す発生源になっている。しかも、科学技術の生み出した新しいトラブルは、もともと自然界にあった問題よりはるかにたちが悪いのだ。今では、中途はんぱに発達してしまった科学技術こそが、地球規模での異常を起こす元凶になるのではないかと恐れる人が増えている。

科学技術のおかげで、現在のわれわれは、非常に②便利な生活をしている。

こういう環境に生まれ育った世代の人には、現在の日本のような生活も特に便利だと思えないのかもしれないが、人類がこれほど便利な生活をするようになったのは、長い歴史のほんの最後の部分にすぎないのだ。

物質文明の最先進国であるアメリカ合衆国の大都会でさえ、蛇口をひねると湯が出たり、外出するのに自動車を使うのが当たり前になってからまだ百年にならない。

しかし、最初に書いたように、けっして無から有は生じない。この便利さも、何もない所から湧いて来ているのではない。われわれは、科学技術を駆使した便利さの代償として膨大なエネルギーを消費し、生活環境を大きく変えつつあるのだ。

（石川英輔『大江戸えねるぎー事情』より）

するはずがない」にあたる内容が入ります。このことが、第二段落で「無限の復元力」と、言い換えられています。bには、「科学技術」を言い換えた「自然科学～技術の力」が入ります。

(2)

答え　中途はん～科学技術

「新しい問題やトラブル」とは、「地球規模での異常」のことであり、「中途はんぱに発達してしまった科学技術」がその元凶になるのではないかと書かれています。

(3)

答え　イ

――線②の後の三つの段落の要点をおさえます。ここでは、人類がこれほどまでに便利な生活をするようになったのは最近のことであり、人類は、便利な生活と引き換えに、「膨大なエネルギーを消費し、生活環境を大きく変えつつある」と書かれています。

10 筆者の主張を読み取ろう

例題

本文 p.33

1 短い文章や原稿用紙二～三枚のエッセイなら、文章を構築する必要はない。すっと書いて、さっと終わってもいい。心の感じるまま流れるように書けばいいから、直感で書くのがいちばん……と言う人もいるだろう。

2 でも、それはあくまで短い文章のときだ。十枚以上書くときに、直感で流れるままに、心の赴くままに書くと、途中でへたるのが普通の人間だ。

3 十枚以上の長い文章を書くには、メモやレジュメをつくり、文章を構築する必要がある。構築力が文章を書く力の中心になるのだ。

（齋藤孝『原稿用紙10枚を書く力』より）

答え

① 上記参照

② 構築

考え方

① 本文では、最後に最も言いたいことが述べられています。

② 「文章を書く」ことについて、第三段落で、長い文章を書くには文章を構築する力が重要だという筆者の主張が述べられています。

「……必要がある。」は、筆者が自分の主張を伝えるときによく使われる表現だね。筆者は、文章を構築する必要性についてうったえようとしているんだ。

といてわかる⑤

□…文章の展開をたどる手がかり

～…この文章でおさえておきたい部分

第一段落の要点をおさえます。ここでは、異なる文化に生きる人間が、お互いに相手の文化を批判し合っている

本文 p.34～35

当たり前であることに対して、私たちはそれが存在する理由など考えません。理論的に筋道だって、相手に説明する習慣もありません。もっと悪いことは、私たちにとって当たり前であり、それが一番良いことだと考えていることがらを、別の文化の人びとが批判することに対して、腹を立ててしまうことです。そして、相手が批判する依りどころとしている相手の文化を、逆に批判してしまうことです。そうなると、反感は増幅されて、憎しみまで生まれてしまいます。文化の

(1) ①

答え ア

指示語の問題なので、直前に書かれていることに着目しましょう。――線部に指示語が含まれている場合は、①のように問題になっていなかったとしても、必ず指している内容をおさえる

うちに、「その文化を担っている人間までも、批判し、否定し、憎んでしまう」ことになるのだということが書かれています。

「〜が必要です」という表現に着目して、第二段落の要点を読み取りましょう。異なる文化で生きる人間同士の対立を生み出さないためには、ルールの「変化や多様性に、注意と関心と、さらには尊敬を払うことが必要」だと述べています。

「必要となってきます」という表現に着目して、第三段落の要点を読み取りましょう。今後、さまざまな異なる文化の人々と生きなければならない日本人には、どうすることが必要かが書かれています。

説明的文章では、最後の段落に結論が書かれていることが多いので、注意しましょう。特にこの文章では、最後の文に「必要」という言葉が出てきており、筆者の主張が書かれた一文だということがわかります。

一部を互いに批判し合っているうちに、その文化を担っている人間までも、批判し、否定し、憎んでしまうことになってしまいます。

そういう状態にならないためには、どうすればいいのでしょうか。文化はルールのかたまりのようなものですが、それは少しずつ変化しています。また、多くの人が一つのルールを「良いもの」として支持していても、必ずそれを否定し別のことを提唱している人びとが同じ日本の中にもいます。そのような変化や多様性に、注意と関心と、さらには尊敬を払うことが必要です。自分の立場と、他の立場にいる人びとの主張とを常に見比べることによって、やがて自分がなぜこちらのルールが良いと考えているのか、なぜ選択しているのかが見えてくるし、わかってきます。

そうなれば、互いに対立した時でも、なぜ対立しているのかを理解できるし、たとえ同調も同感もできなくても、相手を頭から否定したり憎んだりしないでしょう。二十一世紀の日本人は、自分から求めなくても、多くの異なる文化を担う人びとや社会と接触しなければならない状況に生きることになるでしょう。日本人が日本人自らの文化に気づき、それを別の文化の人びとに、わかってもらえるように説明できることが、ますます必要となってきます。

（波平恵美子『生きる力をさがす旅　子ども世界の文化人類学』より）

ようにしましょう。

(1)②

答え **注意と関心と、さらには尊敬を払う**

問いかけが出てきたら、それに対する答えを探しましょう。それが、そのまま要旨につながる場合もあります。

――線部と同じ段落の中に、「〜が必要」という**主張を示す言葉**があることに着目します。

(2)

答え a **自分から**　b **わかって**

筆者の主張（要旨）を読み取るときは、それぞれの段落の要点を読み取り、**話題に対して、筆者が結論を述べている段落**を探します。その段落の要点が要旨です。この文章の話題は、日本人が異なる文化の人々と生きることです。これに対して筆者が結論を述べているのは、最後の段落ですね。筆者は、異なる文化の人々を、否定したり憎んだりすることなく生きるために、日本人はどうすることが必要なのかを述べています。ここにも、「必要」という言葉があることに着目します。

11 登場人物を読み取ろう

例題

本文 p.37

昇平が草太を引き寄せ、明るい声を上げたのだ。

「俺達、ちゃんと自転車で海まで辿り着いたんだぜ」

草太と肩を組み、奏に向かって得意げに告げる。その声は、今日の冒険を自慢しているようにさえ響いた。

「二人だけで海まで着いたんだけど、帰りは疲れちゃったから、俺が電話して迎えに来てもらったんだ」

草太をかばうような言い方だった。草太が泣き出したことには一言も触れず、まるで二人してばててしまったように喋っている。

（竹内真『自転車少年記』より）

答え

① ② 上記参照

③ ウ

考え方

① 昇平の様子を描いている文から見つけましょう。

③ 昇平の動作や言葉や「草太をかばうような言い方」から、明るくよくよしない性格で、友だち思いであることがわかります。

草太がばててしまったことや、泣き出したことは一切言わず、「二人だけで海まで着いた」と得意げに告げている。昇平の明るく優しい性格が読み取れるね。

といてわかる⑥

…この文章でおさえておきたい部分

…この文章で強調されている言葉

前書きがついていることを見落とさないようにしましょう。小説では、前書きがなければ内容を理解できないこ

本文 p.38～39

安堂操は転校生である。同級生の樺島のおかげでクラスになじめたが、しばらくすると樺島は長期欠席をするようになった。そこで、樺島の友人の唐津たちと一緒に、操は樺島を見舞いに行く。樺島の家の庭には、水琴窟という音の出る装置があったが、その日は誰もうまく鳴らすことができなかった。

「安堂君も試してご覧よ」

操は、樺島の口から名前を呼ばれる心地良さに酔いながら庭履きを借りて、少年のひとりから傘を受けとった。飛び石

(1)

答え ウ

前書きから、操が転校生で、樺島のおかげでクラスになじめたという情報をおさえておきます。これをふまえると、学校でも、この場面のように樺島は操を引き立ててくれたということが

とが多くあります。内容理解のためにも、前書きをよく読むことが必要です。

「樺島の～酔いながら」「樺島が希むなら、何度でも応じるつもりだった」から、操が樺島のことをとても大切に思っていることが読み取れます。

樺島の人物像が読み取れます。樺島は、転校生の操のことを気遣ってくれる、気配りのできる少年なのだということがわかります。

普段の唐津がどのような人物なのかが、「活発な」という、性格を直接表す言葉で表現されています。

を渡り、手水鉢の縁においてある欠けた茶碗を手にした。小石はすっかり雨でぬれていて、煮豆のように黒く光った。操は注意深く水を汲み、少しずつ零した。

はじめは金属片が触れあうときのかすかな響きに似て、そのうち、珠をころがすような音になった。琺瑯の器に豆をいれて、くるくるまわしたときの音に似ている。それは、操が幼いときに気にいっていた遊びである。

「ほら、人によるんだよ。安堂君は人柄で、静かな手つきだから、いい音が響くんだ。」

樺島が教室でのときのように引き立ててくれた。

「偶然だよ。」

操は恐縮した。

「もう一度、鳴らして呉れないか。」

樺島が希むなら、何度でも応じるつもりだった。しかし、二度目を終えたとき、小雨だった雨が本降りになり、樺島は皆に座敷へ戻るよう云った。それを機に、一同は引きあげることにした。

暇を告げた帰り途、操は唐津とふたりになった。教室では、口も手脚も盛んに動かしている活発な少年だが、樺島を見舞った帰りは黙りがちだった。

「樺島君の躰が悪いなんて、ちっとも知らなかった。」

操は、頼りきりだった二学期のことをふりかえって悔やむように云った。

「いいんだよ。本人が隠して過ごしているんだから。ぼくたちにできるのは、気のつかないふりをしてやることだ。」

しばらく沈黙がつづいて、唐津は別れ際に立ちどまった。

「背中が、以前よりずっと薄かった。……泣きたくなるよね。」

短く洩らした声が、いつまでも操の耳に残った。

（長野まゆみ『鳩の栖』より）

読み取れ、転校生である操を気遣ってくれていたと考えられます。

(2)

答え a × b × c ○

aは、操が樺島を大切に思っていることは文章中からわかりますが、「唐津に気を遣う」という様子は見られないので、×です。bは、樺島が「社交的」であることがわかる描写はありませんので、×です。cは、文章中後半の唐津の描写に着目すると、○だとわかります。

(3)

答え 暇を告げた

操と樺島とのやりとりが中心に書かれていたのが前半、操と唐津とのやりとりが書かれているのが後半になります。**小説では、場面が変わると、登場人物やその組み合わせも変わることがあります。**

12 気持ちを読み取ろう

例題

本文 p.41

「やったあ」
「やったねッ」
二人は笑顔を満面にして見合わせた。直也がなまずをつり上げたのは初めてだった。元一にしても、こんな大きななまずを見たのは初めてだった。
針をはずすために、つかもうとすると、体をくねらせたり、はねたりした。元気がいい。みちたりた気持ちになった。うれしい。

（最上一平『なまず』より）

答え
①②　上記参照
③　ア

考え方
①　非常に満足し、喜んでいるということを表します。
②　なまずをつり上げて、喜んでいる場面です。
③　文章の最後に出てくる直接描写に着目して、直也の心情をとらえましょう。

直也は初めてなまずをつり上げたこと、元一はこんなに大きななまずを初めて見たことに興奮して、喜んでいるんだね。

といてわかる⑦

□…文章の展開をたどる手がかり
～…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

心情の直接描写（びょうしゃ）が出てきたら、□で囲んで注意するようにします。

本文 p.42～43

夏休みに、十和田湖にキャンプに来た「ぼく」は、ある日の明け方に、湖のほとりに人の姿を見た。それは、クラスメイトの斉藤多恵であった。

声をかけようかと口まででかかったけど、①ぼくは思いとどまった。誰もいないと思って安心しきって振る舞っている彼女に声をかけたら、ものすごくびっくりさせて怖い思いをさせることになる。それに、彼女が胸の前に両手を組み、頭をたれてなにかを祈り始めたからだ。それから少しして彼女は

(1)
「それに」という接続語が用いられていますので、思いとどまった理由は、一つではないことをおさえます。

答え　エ

登場人物の心情は、間接描写によって表されることもあります。ここでは、「ぼく」が斉藤多恵の歌声に感動したことを、歌声を光にたとえることで表現しているのです。

この間接描写からも、「ぼく」が斉藤多恵の歌声に対して感動し、神々しさを感じていることが読み取れます。

顔をあげて歌いだしたのだった。

♪ア――――……

ヴェ・

マ・リ――――――……イ――……ア――――

……

きれいな高音で、透明感のある、すみきった歌声だった。

シューベルトの《アヴェ・マリア》。音楽の授業で小林先生がレコードをかけてきかせてくれたことがあった。女のオペラ歌手が歌うそのレコードより、斉藤多恵の《アヴェ・マリア》のほうがよっぽどきれいな歌声だった。ゆっくりと、気持ちをこめた歌声は、新しい光りとなって静かにたたずむ湖や山々を明るく輝かせていくようだった。まるでこの世に歌を捧げ、すべてを美しく輝かせるように響いた。感動して、ぼくは震えた。それはビートルズの《お願い・お願い・わたし》を初めてきいたときの感動とはちょっとちがったものだった。もちろんぼくに日本語ではない歌詞の意味がわかるわけもない。でも曲のうつくしさや、斉藤多恵の心をこめた歌い方やきれいな声に、すべてが愛とゆるしと希望にみちているような、そんな感じがして、いままで感じたことがない、胸がうち震えてたまらなくなるような不思議な気分になってしまった。ぼくは催眠術にかけられたように立ちあがっていた。歌っている斉藤多恵がぼうっとにじんで輝き始めた。感動して涙がでるのを初めて知った。

彼女が《アヴェ・マリア》を歌い終わったちょうどそのとき、東の空が明るく輝きはじめた。日の出はもうすぐだった。山も湖も木々も、いきいきと生命に満ちた色を輝かせはじめた。②斉藤多恵の歌がすべての自然に新しい一日の息吹を与えたようだった。

（川上健一『翼はいつまでも』より）

(2)

答え　イ

直接描写と間接描写から、ここでの「ぼく」の気持ちを考えます。――線②の直前の「東の空が～輝かせはじめた」や、43ページの2～6行目「ゆっくりと、気持ちをこめた～感動して、ぼくは震えた」から、その美しい歌声に「ぼく」がとても感動していることが読み取れます。

(3)

答え　いままで感じたことがない、胸がうち震えてたまらなくなるような不思議な気分

問二でも考えたように、斉藤多恵の歌声を聞いたときの、「ぼく」の心情は「感動」です。ここでは、それをもっと具体的に述べた部分を探します。「感動」という**直接描写をおさえ、それを言い換えた部分を探しながら**文章を読み進めましょう。

13 心情の変化を読み取ろう

例題

本文 p.45

（授業参観で失敗をしてすねているハァちゃんは、お母さんに頬をぶたれた。）

「ワッ」と泣いて、ハァちゃんは思わずお母さんの膝に顔を埋めた。お母さんの膝は暖かかった。何か前にもこんなことあったな、と思いながら、顔をあげると、お母さんと目が合った。優しい目だ。そして、お母さんの目にも涙があった。

「ハァちゃん、失敗は誰でもあるんや。なんぼ失敗しても、すねたらあかん。わかったやろ。すねたらあかんのやで」

ハァちゃんはもうすねていなかった。それよりも、もっともっとすっきりとした気持だった。

（河合隼雄『泣き虫ハァちゃん』より）

答え

① ② 上記参照

③ イ

考え方

② お母さんの涙を見たこともきっかけとなっています。

③ お母さんの膝で泣いて、ハァちゃんは「すっきりとした気持」になりました。ここからハァちゃんの素直（すなお）な性格が読み取れます。

すねていたハァちゃんが「すっきりとした気持ち」になるきっかけとなった、お母さんの行動や言葉に着目して読み取ろう。

といてわかる⑧

□…文章の展開をたどる手がかり

〜…この文章でおさえておきたい部分

前書きから、大（だい）ちゃんが悩（なや）みを抱（かか）えていることをおさえます。

本文 p.46〜47

町内の相撲大会で四連覇中の大ちゃんは「ヨコヅナ」と呼ばれている。しかし、好きな亜矢ちゃんが、太った人はカッコ悪いと言っているのを聞き、ショックを受け、次の大会には出ないことにした。やせたいと願う大ちゃんは、おじいちゃんとおばあちゃんに、自分の体型の悩みを話してみた。

「人間、誰だって、どこかにカッコいいところがあるの。それは、ひとそれぞれなの、顔がカッコいい子もいれば、勉強ができてカッコいい子もいるし、足が速くてカッコいい子も

(1)

答え

a 誰だって、どこかにカッコいいところがある

b 自分で自分が好きになる瞬間

太っているという悩（なや）みを抱（かか）えて、おじいちゃんとおばあちゃんに自分の悩

ここでは、おじいちゃんが「カッコいい」＝「自分で自分が好きになる瞬間」と言っていることをおさえます。「っていうのは」は、「とは」と同じ役割をしており、この一文を**強調している**と考えることができます。

「〜ではなく」を用いることで、「横綱」と「ヨコヅナ」という言葉が持つ自分にとっての意味を比較し、「ヨコヅナ」の意味を強調しています。

いるし、目立たないけど優しい心がカッコいい子だっているの。太ってることだって、それがカッコよくなるときって、あるのよ」

おじいちゃんも、つづけた。

「カッコいいっていうのは、自分で自分が好きになる瞬間のことだ。他人の前に、まずは自分だ。他人の目を気にしてやせたいなんて言ってるうちはだめだ。ダイエットなんてうまくいくわけないし、へたすりゃ病気になっちまうだけだぞ」

おばあちゃんが「ねえ、大ちゃん……相撲大会に出ないっていうのも、そういうこと？」と、いちばんヤバい話を訊いてきた。

すると、おじいちゃんは、もういい、それはいいんだ、と怖い顔でおばあちゃんに目配せした。

①大ちゃんはうつむいてしまった。

その瞬間、ふわっと浮かんだ光景がある。

三月の相撲大会の表彰式だ。団体も個人も前人未踏の四連覇を達成して、優勝トロフィーを独占した。両手で二つのトロフィーを高々と掲げる大ちゃんに、土俵のまわりから拍手と歓声が贈られた。「ヨコヅナーッ」と最初に声をかけてくれたのは——そうだ、亜矢ちゃんだったのだ。

「ヨコヅナ」は、大相撲の「横綱」と似ているようで違う。肩書きとか序列とか、そういうのではなく、もっとスケールが大きくて、もっとカッコいい響きで、「ヒーロー」や「正義の味方」や「主人公」と同じ種類の言葉なのだと思う。

話は中途半端なままだったが、逃げるように部屋を出た。廊下を進んで居間の前まで来ると、朝からろくすっぽ動かしていない体が急にうずうずしてきた。

②軽く、四股を踏んだ。ほんとうに、軽ーく、そーっと。

でも、安普請の廊下の床はそれだけでドーンと音が響き、ガラス窓もびりびりと震えた。

（重松清『ヨコヅナ大ちゃん』より）

みを話した大ちゃんは、二人の話を聞き、ある光景が思い浮かびました。つまり、二人の話が**きっかけ**となり、ある光景が思い浮かんだのだと考えられます。そこで、**おじいちゃんとおばあちゃんは、どういうことを大ちゃんに伝えようとしたのか**を考えましょう。

(2) 太っていることを悩んでいた大ちゃんが、おじいちゃんとおばあちゃんの話を聞いたことで、**どういう気持ちになったのか**を読み取ります。

問一で考えたように、おじいちゃんとおばあちゃんは、人間には誰にでもカッコいいところがあり、カッコいいとは自分で自分を好きになる瞬間のことだと大ちゃんに話をしました。この話を聞いて大ちゃんは、亜矢ちゃんが「ヨコヅナ」と呼んでくれたときのことを思い出し、自分で自分を好きになる瞬間は、このときなのではないかと考えたのです。

答え　ア

14 随筆文を読み取ろう

例題

本文 p.49

（桜の時期は卒業式の頃か、入学式の頃かということで、筆者は友人と口論になった。）

思いがけず険悪な雰囲気になってしまったとき、それまで黙っていた秋田県出身の友だちが、ぽつりと一言――「俺らはゴールデンウィークに花見をするぞ」。

話としては、それだけのことである。

だが、桜の季節が巡り来るたびに、そして小説で春の場面を描くたびに、ぼくはそのやり取りを思いだしてしまう。「物事を見るときや語るときに、そうじゃない角度だってあるんだ」というのを忘れるなよ」と教えられたような気がするのだ。

（重松清『同じでも「一つ」じゃない』より）

答え

①②　上図参照

③　イ

考え方

②　どのようなできごとから、何について考えたのかをとらえましょう。

③　筆者は、秋田県出身の友人の言葉によって、物事のとらえ方は一つではないということに気づいたのです。

随筆では、筆者が見たり聞いたり実際に体験したりしたことが述べられ、それについての思いや感想がまとめられているよ。

といてわかる⑨

□…文章の展開をたどる手がかり

□…この文章でおさえておきたい部分

□…この文章で強調されている言葉

△…「逆接」の言葉

文章中に問いかけが出てきたときは、

本文 p.50～51

小説家である筆者は、インタビューで、小説を書きはじめたきっかけを質問されるのにうんざりしていた。

たとえばラブレターをもらったとしよう。書いた相手に「ねえ、どうしてラブレターなんか書く気になったの？」と訊ねる人がいるだろうか。訊ねられたほうはその問いの無神経さに戸惑い、そして思うに違いない。どうしてそんなことを訊くのだろう、と。

ラブレターを書いたのは、好きな人がいたからだ。そうし

(1)

答え ア

指示語の指す内容を読み取る問題です。――線部を含む一文から、「私が小説を書いた」理由と、「それ」の指す内容が「同じ」だと書かれていることをおさえましょう。指示語の指す内

その問いかけに対する答えを探しましょう。ラブレターを書いた理由などわかりきったことなので、なぜラブレターを書いたのかという質問などすべきではないのだと筆者は述べています。

小説を書きはじめたきっかけを、質問されることについて、筆者の心情が書かれています。**随筆文でも、小説と同じように、直接描写や間接描写によって心情が描かれる**ことが多くあります。

この文章の後半では、**「　」でくくられて強調されている言葉**が多く出てきていることに着目します。

最後の二つの段落では、「何か」「何かやりたい」などの言葉が繰り返されています。これらについて、筆者が自分の考えを書いているのです。

てその好きな気持ちを、電話でもなく直接会って伝えるのでもなく、手紙という形に託したかったからだ。そんな判りきったことを、わざわざ訊くべきではない、と考えるのがふつうの人の感性だ。

私が小説を書いたのもそれとまったく同じことで、だから冒頭の質問は私には「どうしてラブレターなんか書く気になったの？」という質問に匹敵するくらい、無神経さと想像力の欠如を感じさせるものである。小説なんかを書く気になったのに「きっかけ」などありはしない。ただ、身体の中から湧いて出た。絵でも音楽でもなく、「ことば」の形で湧いて出た。

これもいつも思うことなのだが、絵描きやミュージシャンに「絵描きになったきっかけ」だの「ミュージシャンになったきっかけ」だのを訊く人は滅多にいないのに、なぜことばを扱う者だけがその種の質問に見舞われるはめになるのだろうか。おそらく、絵や音楽のほうが「□」から湧いて出る」という感覚が理解しやすいのだろうとは思うが、「ことば」だって湧いて出るのだ。

最近、若い人が「何かやりたい」と言っているのをよく聞く。そうして彼らは「でもその『何か』が見つからない」と続けて言う。だが、そんなもの見つけようとして見つかるモンではない、というのが私の意見だ。「やりたい何か」は探すものではないだろう。宝探しじゃあるまいし。

ほんとうに「何かをやりたい」人ならば、その「何か」が見つからないだのへったくれだの言う前に、すでに「何か」をはじめているだろう。なぜって、その「何か」を凄く好きなのだから。抑えようとしても、湧いて出てきてしまうのだから。

（鷺沢萠『きっかけなどない』より）

容は直前にあることが多いというのは、どんな文章でも変わりません。――線部の直前の段落で書かれているのはラブレターのことです。ラブレターを書く理由と、筆者が小説を書いた理由が同じ、ということなので、ラブレターを書く理由を読み取ります。

(2)

答え　身体の中

□のすこしあとにある「が」をおさえると、「絵や音楽」と、「ことば」が比較されていることがわかります。「絵や音楽」は湧いて出る感覚が理解しやすく、「ことば」は理解しにくいのです。どこから湧いて出るのかを読み取ります。

(3)

答え　イ

随筆文では、筆者の「考え・感想」は、文章の後半に書かれることが多くあります。この文章では、やりたいことが見つからないという人がいるが、やりたいことというのは探すものではなく、もう始めているものだ、という筆者の意見が書かれています。

15 「は」「が」「を」などを補って読もう

例題

本文 p.53

（中国から日本へ帰ろうとする者を見送ろうと、人々が港で宴を開いてくれた。）

あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。

その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし「我が国にはかかる歌をなむ神代より神もよんたび、今は上中下の人もかうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かなしみもある時には詠む」とてよめりける歌、

「あをうなばらふりさけ見れば春日なる
三笠の山にいでし月かも」

とぞよめりける。

（『土佐日記』より）

答え

① 上図参照

② a こうように　b あおうなばら

③ 仲麻呂のぬし

考え方

③「よめりける」は「よんだ」の意味。「とて」は「〜と言って」の意味で、その前の発言に続けて歌を詠んだとわかります。

16 主語を読み取ろう

例題

本文 p.55

今は昔、唐に、孔子、道を行き給ふに、八つばかりなる童あひぬ。孔子に問ひ申すやう、「日の入る所と洛陽と、いづれか遠き」と。孔子いらへ給ふやう、「日の入る所は遠し。洛陽は近し」。童の申すやう、「日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し。洛陽は遠しと思ふ」と申しければ、孔子、かしこき童なりと感じ給ひける。

（『宇治拾遺物語』より）

答え

① ② 上図参照

③ イ

④ 童

考え方

③「童の」の「の」は主語を表します。

④ ——線③は、「童」が言った言葉。〜〜線いは「申し上げたので」という意味なので、——線③の言葉を言った人が主語になります。

といてわかる⑩

古文や漢文で人物が出てきたら、□で囲んで目立たせましょう。**どのような人物が登場するのかを把握し**

□…この文章で強調されている言葉

本文 p.56〜57

比叡の山に児ありけり。僧たち宵のつれづれに、「いざ、掻餅せん」といひけるを、この児心寄せに聞きけり。「さりとて、し出さんを待ちて寝ざらんもわろかりなん」と思ひて、片方に寄りて、寝たる由にて出で来るを待ちけるに、すでにし出したるさまにて、ひしめき合ひたり。

（『宇治拾遺物語』より）

現代語訳

比叡の山に稚児がいた。僧たちが夜の退屈しのぎに、「さあ、

(1)

答え ①イ ②ア

古文では**主語を丁寧におさえながら読んでいくこと**が大切です。①は、「いざ、掻餅せん」と言った人ですから「僧たち」が主語です。②は、ぼた餅が出来上がるのを待っていた人です

ておくことが、主語を正しく読み取るうえでポイントになります。

前書きに登場人物が出てきているときも、本文に出てきているときと同様に目立たせておきましょう。その登場人物が、文章中でも登場することがあります。

「各」が誰なのか、本文からだけではわかりません。しかし、前書きで登場人物を確認しておけば、「上人」と一緒にいるのだから、上人と一緒に神社を参拝した「たくさんの人」だとわかります。

ぼた餅を作ろう」と言ったのを、この稚児は期待をもって聞いた。「そうかといって、僧たちが作り上げるのを待って寝ないでいるのも具合が悪いだろう」と思って、部屋の隅に寄って、寝たふりをして出てくるのを待っていると、すでに作り上げたようで、大勢で騒ぎ合っている。

上人は、たくさんの人と連れ立って、神社へ参拝に出かけた。そこには、獅子と狛犬が、背中を向け合って立っていた。

上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。深き故あらん」と涙ぐみて、「いかに殿原、殊勝の事は御覧じとがめずや。無下なり」と言へば、各怪しみて、「誠に他にことなりけり。都のつとに語らん」など言ふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習ひあることに侍らん。ちと承らばや」と言はれければ、「その事に候ふ。さがなき童どもの仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りて、据ゑなほして往にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

（『徒然草』より）

現代語訳

上人はたいへん感動して、「ああすばらしい。この獅子の立ちかたは、とても珍しい。深い理由があるのだろう」と涙ぐんで、「なんと皆様、この素晴らしいことをご覧になって不思議に思わないのですか。あまりにひどい」と言ったので、誰もかれも不思議に思って、「本当に他と違っている。都へのみやげ話にしよう」などと言うので、上人はいっそう知りたがって、年輩で、ものを知っているにちがいない顔をした神官を呼んで、「このお社の獅子の立てられかたは、きっと言い伝えがあることでございましょう。少々承りたいものです」と言われたところ、「そのことでございます。いたずら好きな子どもたちがいたしましたことで、けしからぬことでございます」と言って、寄っていって、置き直して去ってしまったので、上人の感涙は無駄になってしまった。

から「児」が主語となります。

(2)

——線③のあとの、「ひしめき合ひたり」の主語は「僧たち」です。「僧たち」はぼた餅を作っていたので、——線③はぼた餅ができ上がった様子を表しています。

答え ウ

(1)

①の主語は、獅子と狛犬の立ちかたに感動し、それに興味を示さない人々を「無下なり」と述べた人物なので、上人です。②の主語は、獅子と狛犬の立ちかたについてよく知りたいと思い、神官に尋ねた人物なので、これも上人です。

答え ア

(2)

「感涙」は感動して流す涙のこと。「いたづらに」は無駄にという意味。このような意味をおさえると、「感涙」と「いたづらなりけり」の間に「は」が省略されていることがわかります。

答え ア

17 書き手の伝えたいことを読み取ろう 例題

本文 p.59

ある犬、肉を咥へて川を渡る。真中にて、その影、水に映りて大きに見えければ、「我が咥ゆる所の肉より大きなる」と心得て、これを捨てて、かれを取らんとす。故に、二つながら、これを失ふ。

その如く、重欲心の輩は、他の宝を羨み、事にふれて貪るほどに、忽ち天罰を蒙る。我が持つ所の宝をも、失ふ事あり。

（『伊曾保物語』より）

答え

① 上図参照

② イ

③ イ

考え方

① 前段落についての考えを述べています。

② 「如く」は、「……と同じように」という意味です。

③ 犬の話の後、「重欲心の輩」は「我が持つ……失ふ事あり」と述べています。

随筆では、初めの部分で言いたいことを述べてから、具体的な出来事をあげている場合もあるので注意しよう。

といてわかる ⑪

……この文章でおさえておきたい部分

師匠は、二本の矢を手にして的に向かう人に、初心者は、最初から二つの矢を持つと二本目の矢をあてにする気持ちが生まれる、だから、この一つの

本文 p.60～61

ある人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の言はく、初心の人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、はじめの矢に等閑の心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へと言ふ。わづかに二つの矢、師の前にてひとつをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。この戒め、万事にわたるべし。

（『徒然草』より）

(1)

答え 初心の人～しと思へ

この文章には、「ある人」に師匠が言ったことと、それに対する書き手の考えが述べられています。登場人物の言葉は「～と」の前で終わることが多いので、ここで覚えておきましょう。

矢で決着をつけようと思いなさい、ということを説きました。この部分は、書き手の伝えたいことに直接つながる、文章の中で大切な要素です。

最後の一文に、書き手の伝えたいことが書かれています。「かく」とは「このように」という意味で、そこまでで書かれている内容を指しています。この話は、盗人が、博雅の三位の篳篥の音に感じ入り、改心して、盗んだものをすべて返したのだということが書かれています。

現代語訳

ある人が、弓を射ることを習うときに、二本の矢を手にして的に向かった。師匠が言うには、「初心者は、二つの矢を持ってはならない。あとの矢をあてにして、はじめの矢をいいかげんにする心が生じる。毎度し損じることなく、この一矢で決着をつけようと思え」と言う。わずかに二本の矢で、師匠の前でひとつをおろそかにしようと思うだろうか（いや、思わない）。怠け心は、自分では気付かなくても、師匠はこれを知っている。この戒めは、万事に通じるはずだ。

博雅の三位の家に盗人入りたりけり。三品、板敷のしたに逃げかくれにけり。盗人帰り、さて後、はひ出でて家中を見るに、のこりたる物なく、みなとりてけり。篳篥一つを置物厨子にのこしたりけるを、三位とりてふかれたりけるを、出でてさりぬる盗人はるかにこれを聞きて、感情おさへがたくして帰りきたりて云ふやう、「只今の御篳篥の音をうけたまはるに、あはれにたふとく候ひて、悪心みなあらたまりぬ。とる所の物どもことごとくに返したてまつるべし」といひて、①みな置きて出でにけり。むかしの盗人は、またかく②優なる心もありけり。

（『古今著聞集』より）

現代語訳

博雅の三位の家に盗人が入った。博雅の三位は、板敷の下に逃げ隠れた。盗人が帰り、そのあと、（三位が）はい出て家中を見ると、残っている物はなく、（盗人が）みな盗んでいた。篳篥一つを置物厨子に残していったのを、三位がとって吹いていらっしゃったのを、出て行ってしまった盗人が遠くで聞いて、感情をおさえられなくなって帰ってきて言うには、「ただいまの篳篥の音をお聞きすると、しみじみと尊く感じまして、悪い心がすべて改まりました。盗んだ物はすべてお返し申し上げましょう」と言って、すべて置いて出て行った。昔の盗人には、このように（風流を解する）優美な心もあったのである。

(2)

師匠の言葉に着目しましょう。師匠は、「後の矢を～等閑の心あり」と、次の機会を頼ってしまい、怠け心が生まれてしまうことを述べています。

答え ウ

(1)

盗人の言葉に着目します。博雅の三位の篳篥の音色のすばらしさに感動し、悪い心が改まったため、盗んだものはすべて返すと、盗人は言っています。

答え ウ

(2)

「優なり」とは、「優美だ」「優れている」という意味です。美しい音色に感じ入ることのできた盗人のことを、「優なる心」の持ち主だと評しています。

答え エ

18 漢文のきまりを知ろう

例題

本文 p.63

漢人適呉。呉人設笋。問何物。曰、「竹也。」帰煮其簀、不熟。曰、「呉人礪轆、欺我如此。」

（『陸雲笑林』より）

答え

①② 上図参照

③ エ

④ いんちき

考え方

① レ点がついている字は、下の字を先に読みます。

② 一点から二点に返って読みましょう。

③ 「簀」から「煮」に返ります。

④ 「呉の国の人は」に続く部分です。

19 漢詩を読もう

例題

本文 p.65

春暁　孟浩然

春眠不覚暁　1 2 3 4 5

処々聞啼鳥　1 2 4 3

夜来風雨声　1 2 4 3

花落知多少　1 2 4 3

答え

①② 上図参照

③ イ

④ 夜来風雨の声

考え方

② 起句・承句・転句・結句の四句から成ります。

③ 句が五字で、四句から成る五言絶句。

④ 視点が切り替わり、前の晩の激しい嵐について描かれています。

といてわかる⑫

…この文章でおさえておきたい部分

本文 p.66～67

子曰、「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。人不知而不慍、不亦君子乎。」

（『論語』より）

返り点や送り仮名にしたがって、正しい順番で漢文を読むことが大切です。読む順番に数字を付すなど工夫しましょう。

(1)

答え 学而時習之

書き下し文の通りに読むと、「学時之習」の順番になるので、「之」から「習」に一字戻ればよいということがわかります。なので、習の下にレ点をつけます。なお、「而」はここでは読

漢文と書き下し文、あるいは、漢文と現代語訳を照らし合わせながら解く問題も出題されることがあります。

書き下し文にするときは、助動詞・助詞として訓読する漢字は、ひらがなに直します。

「レ点」と「一点」が組み合わさっています。この場合は、まず「レ点」を読み、そのあとで、「一点」「二点」と読みます。つまり、「兎(うさぎ)を」→「得んことを」→「冀(こいねがフ)ふ」となります。

「可」と「不」が組み合わさり、「べからず」と読みます。これは、「〜できない」という意味です。

書き下し文

子曰く、「学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや。朋遠方より来たる有り、亦楽しからずや。人知らずして慍みず、亦君子ならずや。」

現代語訳

先生がおっしゃることには、「学問をして折にふれて復習するのは、なんとうれしいことではないか。同じ学問を志す人が遠方から来るのは、なんと楽しいことではないか。人が自分を認めてくれなくても腹を立てないのは、これもやはり人格のできた人だと言うべきではないか。」と。

1 2 6 4 3 5

宋人有耕田者。田中有株、兎走触株、折頸而死。因釈其耒而守株、冀復得兎。兎不可復得、而身為宋国笑。

（『韓非子』より）

書き下し文

□。田中に株有り、兎走りて株に触れ、頸を折りて死す。因りて其の耒を釈てて株を守り、復た兎を得んことを冀ふ。兎復た得べからずして、身は宋国の笑と為れり。

現代語訳

宋の人に田を耕す者があった。田の中に切り株があり、兎が走ってきて切り株にぶつかり、首を折って死んだ。そのためにすきを投げ捨て（田を耕すのをやめて）切り株から離れず、また兎を得ることをひたすら願った。兎は二度と得られず、その身は宋の国中の笑いものとなった。

まない漢字（置き字）で、書き下し文では書きません。

(2) 先生は、うれしく楽しいものであるという学問の素晴(すば)らしさを話し、人に認められなくても腹を立てるべきではないという、学問に取り組む心がまえを説いているのです。

答え ア

(1) ——線部のあとに、宋(そう)の人が何を期待していたのかが書かれています。兎が切り株にぶつかって死に、何もせずに兎を手に入れられた宋の人は、同じようにしてまた兎を手に入れられることを期待しているのです。

答え エ

(2) □は訓読文ではどこにあたるのかを確認しましょう。「宋人有耕田者」がそれにあたるので、返り点の読む順番に気をつけて、書き下し文を選びましょう。「宋人田耕者有」の順番に読めばよいとわかります。

答え イ

20 表現技法を知ろう

例題

本文 p.69

A　切符　はたちよしこ

切符が
いちまい

（第一連）

さくらの　はなびらと
ならんで
風に　吹かれている

（第二連）

はなびらに
改札の　ハサミのあとを
じまんしながら

（第三連）

B

寝静まる里のともしびみな消えて
天の川白し竹やぶの上に

正岡子規

C

明月や葺の中の水たまり

西山泊雲

答え

①②③④　上図参照

⑤　ア

考え方

① 擬人法を用いています。

② 普通の語順は「じまんしながら／吹かれている」です。

③ 普通の語順は「上に／白し」。倒置法を用いています。

④ 体言止めです。

表現に工夫しているところは、筆者が特に読者に強く伝えたいと思っている部分だよ。

といてわかる⑬

〜…この詩・短歌・俳句でおさえておきたい部分

□…この詩・短歌・俳句で強調されている言葉

本文 p.70〜71

A　紅梅や枝々は空奪ひあひ　鷹羽狩行

B　石崖に子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕焼小焼　北原白秋

C　髪あらへば髪に花さき山みづにさくらいざよふ清滝の里　茅野雅子

(1)

「枝々は空奪ひあひ」は、人でない「枝々」の動作や様子を、人の動作や様子にたとえて表現しているので、擬人法です。

答え　ウ

詩・短歌・俳句で**表現技法が用いられているところは、強調されている**と考えましょう。

Cの短歌は、「髪を洗えば、散ってくる桜の花びらが髪に花が咲いたように付き、山の清流には桜の花びらがたゆたう、清滝の里よ」という意味です。

この詩は、人生における通過点を「橋」にたとえて描いています。

ここでは、呼びかけが用いられています。これから「あかるい青春の橋」を渡ろうとする「少女」に、年長者である作者が呼びかけるというかたちで、読み手にテーマを身近に感じさせています。

D　かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

石川啄木

E　稲刈りてさびしく晴るる秋の野に
黄菊はあまた目をひらきたり

長塚節

橋　高田敏子

少女よ
橋のむこうに
何があるのでしょうね

私も　いくつかの橋を
渡ってきました
いつも　心をときめかし
急いで　かけて渡りました

あなたがいま渡るのは
あかるい青春の橋
そして　あなたも
急いで渡るのでしょうか

むこう岸から聞える
あの呼び声にひかれて

答え　ア

(2)　Bは、句末が名詞で終わっているので「体言止め」。Cは、「体言止め」と、桜の花びらが髪に付いた様子を「髪に花さき」とたとえているので、「隠喩」。Dは、「体言止め」と、形の似た言葉を並べているので、「対句法」。Eは、「黄菊」の様子を人が目をひらく様にたとえているので「擬人法」です。

答え　エ

(1)　実際に橋を渡ったのではありません。第三連に「あかるい青春の橋」とあるように、橋は人生における通過点をたとえた表現です。これは「〜のように」などを使わずにたとえているので、隠喩です。

答え　あかるい青春の橋

(2)　多くの詩には句点（。）がありません。まず、句点が省略されている行末を考えます。その中から、行末が体言で終わっている行を探します。

21 詩を読み取ろう

例題

本文 p.73

ある日ある時　　黒田三郎

秋の空が青く美しいという
ただそれだけで
何かしらいいことがありそうな気のする
①呼びかけ
そんなときはないか
空高く噴き上げては
むなしく地に落ちる噴水の水も
わびしく梢をはなれる一枚の落葉さえ
②擬人法
何かしら喜びに踊っているように見える
そんなときが

答え
①②　上図参照
③　エ

考え方
①　落葉を人のように表現しています。
③　この詩では、美しい秋の空や、同じ動きを繰り返す噴水、梢を離れる葉など、日常の些細な風景に幸せを感じるひとときがないかと問いかけています。

噴水の水が繰り返し空高く噴き上げているのを、「噴き上げては」と表現しているね。

本文 p.74～75

若葉よ来年は海へゆこう　　金子光晴

絵本をひらくと、海がひらける。若葉にはまだ、海がわからない。
若葉よ。来年になったら海へゆこう。海はおもちゃでいっぱいだ。

といてわかる⑭

～…この詩でおさえておきたい部分
□…この詩で強調されている言葉

まだ海を知らない「若葉」に「来年になったら海へゆこう」と何度も呼びかけて、強調しています。若葉と海で

(1)　答え　イ

「若葉よ。来年になったら海へゆこう。」という表現から、「若葉」と海へ行くのは来年だということがわかります。つまり、この詩は、作者の想像が描かれたものなのです。——線部では、

遊ぶ日を心待ちにする、作者の気持ちを読み取ります。

第三連・第四連では、作者の想像の中の海で若葉が遊んでいる様子が、直喩や隠喩を用いて描かれています。

「むこうから　かけてくる村の人／こちらから　かけていく町の人」には対句法が、「夕だちだ　夕だちだ」には反復法が、「空のおさらを　ひっくりかえしたようだ」には直喩が用いられています。さまざまな表現技法を用いて、突然降り出した夕だちにあわてふためく人々の様子が表現されています。

心情の直接描写が出てきたら、目立たせておきましょう。作者の感動や、詩の主題の読み取りに直接つながることが多くあります。

うつくしくてこわれやすい、ガラスでできたその海は
きらきらとして、揺られながら、風琴のようにうたっている。

海からあがってきたきれいな貝たちが、若葉をとりまくと、
若葉も、貝になってあそぶ。
若葉よ。来年になったら海へゆこう。そして、じいちゃんも
いっしょに貝になろう。

夕だち　　村野四郎

ヨシキリが
大さわぎして　にげまわる
むこうから　かけてくる村の人
こちらから　かけていく町の人
みんな　ひさしへ　とびこんだ
夕だちだ　夕だちだ
①空のおさらを　ひっくりかえしたようだ。

雨はどうどう
ぼくの頭から　せなかのほうへ
滝のように流れおちた
けれども　ぼくはおどろかない　へいきだ

ぼくは水泳の帰りみち
帽子もかぶらず　まるはだかだ
あわてる人々をながめながら
ゆうゆうと　道を歩いてきた
②そしてときどき　天のほうをむいて
夕だちを飲んでやった

若葉が海で遊んでいる様子が描かれています。

(2) 答え ア
この詩は、作者が、孫である「若葉」に呼びかける形で描いています。「若葉よ。来年になったら海へゆこう」「若葉も、貝になってあそぶ」「じいちゃんもいっしょに貝になろう」などの表現から、若葉への愛情を読み取りましょう。

(1) 答え エ
第一連から、夕だちが降り始めたときのことを描いた詩だとわかります。降り出した夕だちの勢いが大変強いのだということが、「空のおさらをひっくりかえしたようだ」と直喩を用いて表現されています。

(2) 答え ア
「水泳の帰りみち」だった「ぼく」は、「まるはだか」だったので、夕だちが降っても平気だったのです。「ゆうゆうと」という描写に着目し、――線②のときの「ぼく」の様子を読み取りましょう。

22 短歌・俳句を読み取ろう

例題

本文 p.77

① 海恋し潮の遠鳴りかぞへては
少女となりし父母の家
与謝野晶子

② みちのくの母の命を一目見ん
一目みんとぞただにいそげる
斎藤茂吉

③ 閑さや岩にしみ入る蟬の声
松尾芭蕉

④ うつくしや障子の穴の天の川
小林一茶

答え
①② 上図参照
③ 恋し

考え方
① ①・③・④は初句切れ、②は句切れなしです。
② 強調表現がある言葉には、作者の感動の中心になります。
③ 作者の気持ちが歌の最初に表現され、その感動がわかりやすくなっています。

②の短歌では「一目見ん」という言葉が繰り返されて、母が生きているうちに会いたいという作者の思いが強く伝わってくるね。

といてわかる⑮

□…切れ字
〰…季語
□…気持ちを表す言葉

「ぞ」「や」「かな」「けり」などの助詞が短歌・俳句の中に含まれる場合は、

本文 p.78～79

A 槍投げて大学生の遊ぶ見ゆ大きなるかなこの楡の樹は
土岐善麿

B いつしかに春の名残となりにけり昆布干場のたんぽぽの花
北原白秋

C おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉深く
伊藤左千夫

(1) **答え C**
短歌では、気持ちが表されている言葉や、「ぞ」「や」「かな」「けり」などの切れ字、表現技法などによって、作者の感動が強調されます。A・Bは、「かな」「けり」に着目しましょう。C

「切れ字」といって、その部分が強調されていることが多いので、印をつけて目立たせておくようにしましょう。

Dのように特に強調されている言葉が見つからない場合は、歌われている情景から感動の中心を考えましょう。作者は、蜜柑の香りがしたことで、また冬が来るんだなあと感じたのです。ここから、感動の中心は「冬がまた来る」だということが読み取れます。

俳句には、**季節を表す言葉**を入れるという決まりがあります。この言葉を「**季語**」といいます。季語を見つけたら印をつけて目立たせておくようにしましょう。季節も書き込んでおくとよいでしょう。

気持ちを表す言葉が短歌や俳句の中に出て来たときは、目立たせておくようにしましょう。この「ゆかし」は「心ひかれる」という意味です。

D 街をゆき子供のそばを通るとき蜜柑の香せり冬がまた来る　木下利玄

A ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道　中村草田男

B いくたびも雪の深さを尋ねけり　正岡子規

C 山路来て何やらゆかしすみれ草　松尾芭蕉

D 五月雨をあつめて早し最上川　松尾芭蕉

は「驚きぬ」と気持ちがわかる言葉があります。

(2) 短歌の意味を考えて、意味上の切れ目を探します。Aは三句目、Dは四句目で、意味をいったん切ることができます。

答え A イ D ウ

(1) Aの俳句は、「木の芽道」という名詞で句が終わっています。このような、句末を名詞で終える表現技法は「体言止め」です。

答え ア

(2) Aは「木の芽道」が季語で、季節は春です。Bは「雪」が季語で、季節は冬です。Cは「すみれ草」が季語で、季節は春です。Dは「五月雨」が季語で、季節は夏です。

答え A ア B エ C ア D イ

確認のテスト 1

説明的文章①

本文 p.80～81

□…文章の展開をたどる手がかり
～…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

傍点が付けられている「さん」に着目しましょう。この語が何度も出てくることから、この段落の読み取りで大切だということがわかります。

日本人は何から何までさんをつけて呼ぶようになった。なんと、神から動物や食物に至るまで。神は「神さん」と呼ばれ、象さん、アヒルさん、おサルさん、というふうに動物にもさんがつけられる。お豆さん、おイモさんなどと食物でさえさんづけだ。（中略）お医者さん、お巡りさん、運転手さん、そば屋さん、社長さん、しまいには、あんたさん、こちらさん、おとなりさん、……いや、さんがつかないもののほうが少ないくらいである。

①なぜ、それほどまでにさんをつけなければならないのだろう。むろん、本来の敬意がいくらかはこめられている場合もあるが、ほとんどが「したしみの気持をあらわすことば」（三省堂版『国語辞典』）とみてよい。では、どうしてすべてに対して「したしみ」をあらわさなければならないのか。私はその根源に、またしても日本人の小心さを見る。つまり、周囲に対する無意識の恐怖が、さんをつけることによってしずまるのである。

私は日本人は本質的には臆病な民族ではないかと（自分自身をかえりみて）考えている。A、できるだけ敵をつくりたくないのだ。相手を敵にしないためには、相手の気分を損なわないこと、すすんで相手を仲間に引き込むにかぎる。その場合、

「なぜ～だろう」「どうして～か」という疑問の形に注意しましょう。疑問の形をとることで、読者にもその答えを考えるよう促しています。つまり、**強調されています。**

(1)

答え **周囲に対～識の恐怖**

さんは「したしみの気持をあらわすことば」だと筆者は述べています。さんをつけることで、「周囲に対する無意識の恐怖」がしずまるのだと書かれています。

(2)

答え **ア**

前で書かれていることの、順当な結果があとで書かれています。

相手に特別の敬意を払うほうがよさそうに思えるが、しかし、あまりに、敬意をあらわしすぎると相手から見下され、反対に強圧的に出られるおそれがある。過度の敬意は相手に力の意識を呼びおこし、それが災難となって降りかかってくるかもしれない。それよりも、むしろ自分と同じ次元に相手を据えて、いささかの敬意をもって仲間のように対するのが最も無難なやり方である。それには、さんという呼称は何と便利な言葉であろう。

私は、日本人は周囲に対して、いつも無意識の恐怖心を抱いている、といったが、しかし、その恐れはかならずしも相手に自分の存在をおびやかされるといった B ではない。それよりも、何か面倒なことがわが身に降りかかってきはしまいかと、それをおそれるいわば②本能的な保身の知恵というほうが当たっていそうである。じっさい、相手の気分を害して、相手に恨まれたり、相手を怒らせたりしてしまうことは、このうえなくわずらわしいことではないか。③そういうわずらわしさからできるだけ逃れたいというのが、日本人の偽らざる心情なのである。

（森本哲郎『日本語　表と裏』より）

「敬意」という言葉は、ここまでにも出ていましたが、この段落では何度も出てきています。強調された言葉だということを念頭において、この段落を読み取りましょう。

「それよりも」を使って、「相手に特別の敬意を払う」ことと、「いささかの敬意をもって仲間のように対する」ことを**比較**しています。こうすることで、さんを使って「仲間のように対する」ことが日本人に合ったやり方であるという筆者の考えが、**強調されています**。

(3)

答え　恐怖心

B を含む文の主語「その恐れは」が指すものを考えましょう。

(4)

答え　エ

——線部の近くにある指示語は大切です。——線②の前にある「それ」の指す内容は、「何か面倒な～しまいか」です。日本人が相手をさんをつけて相手にいささかの敬意を払うのは、自分に面倒なことが降りかかるのをおそれるからなのです。

(5)

答え　相手の気～てしまう

——線③の「そういう」の指す内容を読み取ります。

確認のテスト 2

説明的文章②

本文 p.82～83

□…文章の展開をたどる手がかり
～…この文章でおさえておきたい部分
▯…この文章で強調されている言葉
△…「逆接」の言葉

文章全体を通して、「エネルギー」「失敗」「回復」が何度も出てきています。強調された言葉だということを念頭において文章を読み取りましょう。

「だからといって」に着目します。これは、前で書かれている内容について、予想される反対の内容を打ち消すときに用いられる、逆接的な表現です。

エネルギーは人間の行動の源です。これは自分自身の考え方や行動を変えるのに不可欠なものです。失敗からできるだけ早く回復するには、失われたエネルギーをいかに上手に早く溜めるかが大切になります。

ただし、①このエネルギーは、意識して自分で生み出せるようなものではありません。それが非常に辛く悩ましいところです。だからといって、よそから注入できるものではないし、自分で努力したり、周りから励まされることで出てくるものでもないのです。それこそ岩から湧き水が滲み出してくるように、自分の中から自然に湧き出て来るのをひたすら待つしかありません。そして、そのように何もできずに待つしかないということが、失敗のショックやダメージによって打ちひしがれている人に、輪をかけて辛い思いをさせる原因にもなっています。

失敗した人はたいてい、「できるだけ早く汚名を返上したい」という思いを持っています。それなのにエネルギーの回復をひたすら待たなければいけないのは非常に辛いことです。②それができずに、焦りからつい、エネルギーが十分に溜まりきらない中途半端な状態で動き出してしまう人もたくさんいます。

このときに、多少なりともエネルギーが回復していれば、失

(1)

答え **それこそ～ません。**

――線①の次の段落の三～五行目に着目しましょう。ここでは、エネルギーは自分で生み出せるものではなく、自然に湧き出てくるのを待つしかないのだということが、湧き水にたとえて書かれています。

(2)

答え **エネルギーの回復をひたすら待つこと(。)**

――線②の指す内容は、その直前の一文にあります。指示語にあてはめて意味が通るように内容をまとめましょう。

敗と向き合ってそれなりに行動することはできます。しかし、自分の考えや行動を変えるだけのエネルギーがまだあるわけではないので、せっかく奮闘しても状況を大きく変えるまでには至らないことが多いのです。残念ながらこれでは③エネルギーの無駄遣いにしかなりません。

もちろん、苦しい状況の中で頑張った努力が報われることもあります。□、こういうことは滅多にありません。頑張って動いても、よい結果が得られないことのほうが多いのが現実です。だから動きたくてもがまんして、自分の考えや行動を変えるだけのエネルギーがしっかりと蓄積されるまで待ってから行動するほうが結果としていいのです。これはスポーツ選手のケガと同じことです。ケガが治りきらないうちに焦って復帰しようとすると、結果として回復が遅くなってしまいます。

「エネルギー」「失敗」「回復」といった強調された言葉を手がかりにしながら、文章全体の話題を読み取ると、**話題に対する筆者の考え**は、最後の段落の「だから動きたくても～いいのです」に書かれていることがわかります。

(3) 答え エ

――線③の直前にある「これ」に着目し、指す内容を読み取ります。エネルギーが十分に溜まらないままで奮闘しても、汚名を返上するまでには至らないことが多いのです。

(4) 答え エ

□の前後で「報われることもあります」「滅多にありません」と反対のことが書かれています。

(5) 答え **動きたく～行動する**

「失敗からの回復」という話題に対して、最後の段落で筆者の意見がまとめられています。

（畑村洋太郎『回復力　失敗からの復活』より）

確認のテスト 3 文学的文章①

本文 p.84～85

□…文章の展開をたどる手がかり
～…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

前書きから、登場人物や、ここまでのあらすじをしっかり把握しておきましょう。

洋は、祖父と二人で暮らしている少年である。祖父に隠れて自転車大会に出場した洋は、その実力が自転車のジュニアクラブの人に認められ、入部を勧められた。しかし、祖父に反対されるのではないかと思った洋は、知り合いの照吾さんにこのことを相談しに行った。

照吾さんは腕組みをしたまま、首を左右に動かした。肩の凝りをほぐしているみたいだ。やがて首の動きを止めると、腕組みを解き、書類を洋の方に滑らせた。

「①やめた方がいいと思う」

え？　聞き間違いかと思った。それほど意外な言葉だった。

照吾さんは賛成してくれると思っていたのだ。もしかすると、祖父さんを説得してくれるかもしれない、と淡い期待も抱いていた。

「当然、練習には参加すべきだ、君にはそれだけの実力がある、ぜひやりなさい……と私が言うと思った？」

洋はうなずいた。それこそ照吾さんに期待した言葉だ。

「実力の問題ではないと思う」と静かに照吾さんは言った。

「これは意志と情熱の問題だ」

「意志と情熱、ですか？」

「そうだ。意志だ。それに、熱意。情熱。それがなければ、な

文学的文章でも、強調された言葉は目立たせましょう。ここでは、**「こそ」という言葉が「それ」という指示語を強調していること**をおさえます。そのうえで、「それ」という指示語の指す内容を読み取ります。

(1)

答え　**照吾さん～ていた。**

洋が照吾さんに期待していたのは、ジュニアクラブに入ることに賛成してくれることと、祖父さんを説得してくれることであるとわかります。

(2)

答え　**イ**

洋の気持ちにまだ迷いがあることを見抜き、照吾さんは、洋が意志と情熱を持っているのか確認しようとしています。

にをやっても駄目だと私は思う。なにかを成し遂げるには意志と熱意が不可欠だ。それは自転車競技でも変わらないと思う」

自分には意志がないのだろうか？　洋は自問した。意志はある。熱意だってあるつもりだ。

「意志はあります」

洋は言った。

「意志があれば、迷わないはずだ」②いつになく厳しい口調だった。

自転車に乗りたい。その気持ちには嘘も揺らぎもない。

洋は息を吸い込んで天井を見上げた。大きな梁が剝き出しになっている。黒々とした立派な木だ。木と木が組み合わさって、建物となり、建物を支えている。

まだ始めたばかりだ、と洋は思った。先の心配をすることはない。③やりたいことをやればいいのだ。

「迷いが消えたようだね」

照吾さんが笑顔になった。

ポットから新しいコーヒーを洋のカップに注いでくれた。

迷いは消えてはいなかった。けれど、自分にジュニアクラブの練習に参加する意志があるのははっきりとわかっていた。今のところ、それで充分だった。

（川西蘭『セカンドウィンド1』より）

心情語は用いられていませんが、これらは、洋の心情がはっきり書かれた直接描写です。このような描写は必ずおさえましょう。

(3)

答え　ウ

本当に洋の意志が固まっているのかを確認したくて、照吾さんは厳しい口調で言ったのです。

(4)

答え　ジュニアクラブの練習に参加すること（。）

文章の終わりから三行目「自分にジュニアクラブ～わかっていた」から、「やりたいこと」はジュニアクラブの練習に参加することだとわかります。

確認のテスト 4 文学的文章②

本文 p.86～87

…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

「或る窯場」での筆者の体験が書かれています。**随筆文では、筆者が体験したり見聞きしたりしたこと（できごと）が書かれているところと、筆者の「考え・感想」が書かれているところを読み分けましょう。**

心情を表す直接描写が多く出てきます。これは「或る窯場」での体験についての心情です。なお、「気がさす」とは、「うしろめたい気持ちがする」という意味です。

或る窯場で絵付師の仕事を見せてもらったことがある。はじめのうちは背後からそっと見ていた。白髪の頭越しに見える筆さばきはさすがに年季の入った職人芸であった。小さな白磁の酒盃に極細の筆で鳥の上絵を描き込んでゆくのだが、筆が自在に伸びて、一個一個の盃が同じ図柄でありながら別のものになっている。ゴム判で押して塗り絵のようになぞってゆくのでは、こういう生き生きした上絵にはならない。私は息をひそめて感心して見ていた。

その人は一心に仕事をしていて、私が見ているのに気づいていないようだった。しばらくして私は［A］していることに気がさして声をかけた。――お仕事中すみません、見せてもらっていいですか。そう言って彼の横から手元をのぞきこんだ。

いいですよ、どうぞ、と言ってくれたのだが、そのとたんから彼の筆使いがすっかり変わってしまった。ぎこちなく不安定になって、描線がすっと伸びない。筆がかすかにふるえる。それまでの盃と同じ絵ではあるけれども死んだ絵になってしまった。

――見られていると思うと、なんや力が入ってしもて。

絵付師がはずかしそうに笑って言った。どうも申し訳ないこ

(1)

答え **エ**

［A］のあとの「お仕事中すみません、見せてもらっていいですか」から、ここで初めて絵付師に声をかけたことがわかります。では、それまではどうだったのかを表す言葉を探すと、最初から二行目に「背後からそっと見ていた」とあるのが見つかります。

(2)

答え **生き生きした上絵**

筆者に見られていると絵付師に意識させたことで、「死んだ絵」にしてしまいました。一方、絵付師が筆者の視線を意識する前の絵は、「生き生きした上絵」だったのです。

とであった。

これは絵の話だが、筆で字を書くときも同じである。気持ちが乱れたら字も乱れる。

書道ばかりではない。万年筆で書くときでも鉛筆で書くときでも、あるいはボールペンで書くときでも、字はそのときの気分を正直に映してしまう。心配事があって落ち着かないような日には、自分の字がいつもの字と同じようでいながら少し違っている。自分の字がいやな字に見えて、ますます B 気分になる。そんなことが、誰にでもあるのではないだろうか。その逆に、気分よく書ける日もあることはもちろんである。

自分用のメモをとるときの字はついぞんざいになる。きちんと書こうと思い直しても、なかなかそうはいかないものだ。他人に渡すメモなら少々急いでいても自然にいくらかましになる。気の張る相手に出す手紙は大真面目な字になる。どうも堅苦しいなと思いながら、やはりがんばってしまう。文面も堅苦しいものになる。気のおけない友だちに出す手紙なら文面ものびのびし、字ものびのびする。

筆記具が何であれ、私たちの書く字は良くも悪くも私たちの心のありようとつながっている。

（高田宏『字を書くということ』より）

前半で、気持ちの乱れによって筆使いが乱れるという「絵」の例を示し、後半では、その例をもとに「字」についても同じことが言えると具体的に説明しています。

随筆文では、筆者の「考え・感想」が、文章の最後のほうにまとめられていることが多くあります。この文章では、最後の段落が筆者の考えのまとめになっています。

(3) **答え 落ち着かない**

B の直前に「ますます」とあるので、「いつもの字と同じようでいながら少し違(ちが)っている」字を書いたときの気分を表す言葉を探しましょう。

(4) **答え これは絵の**

「絵」についての体験を受け、筆者はここから「字」を書くことについての考えを展開させています。

(5) **答え イ**

最後の段落に、筆者の最も伝えたいことが書かれています。この内容に最もあてはまるものを選びましょう。

確認のテスト 5 古文①

本文 p.88～89

□…文章の展開をたどる手がかり
～…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

「ある人」と「主（ぬし）」は同じ人物のことです。

ある人（が）、鶏を飼いけるに、日々に金のまろかしを卵に産む事あり。主（は）、これを見て慶ぶ事、限りなし。然れども、日に一つ産む事を堪へかねて、「二つも三つも、続けさまに産ませばや」とて、その鳥を打ちさいなめども、その験もなし。日々に一つよりほかは産まず。

主（は）、心に思ふやうは、「いかさまにも、この鳥の腹には、大なる□や侍るべき」とて、その鳥の腹を割く。かやうにして、頂きより足の爪先に至るまで見れども、別の金はなし。その時、主（は）、後悔して、「もとのままにて置かましものを」とぞ申しける。

（『伊曾保物語』より）

現代語訳

ある人が、鶏を飼っていたところ、毎日金の球を卵に産んだ。飼い主は、これを見てこのうえなく喜んだ。しかし、一日に一つ卵を産むことに我慢ができなくて、「二つも三つも、続けざまに産ませたい」と思って、その鶏を叩き責めたものの、その効き目もない。一日に一つよりほかは産まない。

飼い主が、心に思うには、「きっと、この鶏の腹には、大きな金があるのだろう」と思って、その鶏の腹を割いた。このようにして、頭の先からつま先に至るまで見るけれど、特別の金はない。その時、飼い主は、後悔して、「もとのままで置いておけばよかったのに」と申した。

述語にあたる部分に——線が引かれているので、主語にあたる部分を探します。前後の内容から主語を読み取り、——線部の近くに書き込んでおきましょう。

この文章で作者が伝えようとしていることが、ここには書かれていません。文章の展開から考えましょう。登場人物の心情も手がかりとなります。欲を出した飼い主は、最後に後悔しているのです。

(1)
鶏が毎日金の球を産むことを喜びながらも、一日一つしか産まないことに我慢できなくなってしまったのは「主」です。

答え ア

(2)
□よりあとに、「鶏の頭の先からつま先まで見たが、金はなかった」とあることから考えます。

答え 金

(3)
話の展開から、作者の伝えようとしたことを読み取ります。

答え ア

「必ず」という強調するための言葉があるのに着目しましょう。木登りの話では、「けがは、簡単なところになって、必ずいたすものだ」と書かれています。また鞠を蹴る話では、「安心だと思うと、必ず落とす」と書かれています。**この二つの内容の共通点を読み取りましょう。**

この文章には、主語が省略されているところがいくつかあります。「〜と言葉をかけ侍りし」は「高名の木登りといひしをのこ」、「〜と申し侍りしかば」は筆者、「『〜にさうらふ』といふ」は「高名の木登りといひしをのこ」が主語です。

高名の木登りといひしをのこ、人をおきてて、高き木に登せて梢を切らせしに、いと危く見えしほどは言ふ事もなくて、おるるときに軒長ばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と①言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるるともおりなん。如何にかく言ふぞ」と②申し侍りしかば、「その事にさうらふ。目くるめき、枝危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、必ず仕る事にさうらふ」といふ。

あやしき下臈なれども、聖人の戒めにかなへり。鞠も、難き所を蹴出して後、安く思へば、必ず落つと侍るやらん。

（『徒然草』より）

高名の木登りといひしをのこ（人が）　をのこが　高名の木登りといひし　私が

現代語訳

名高い木登りといわれた男が、人に指図して、高い木に登らせて梢を切らせたときに、大変危なく見えた間は何も言うことがなくて、下りるときに軒の高さくらいになったところで、「けがをするな。気をつけて下りなさい」と言葉をかけましたので、「これほどになっては、飛び降りても下りられるでしょう。どうしてこのように言うのですか」と（私が）申しましたところ、「そのことでございます。目がくらんで、枝が危ない間は、本人が恐れておりますから申しません。けがは、簡単なところになって、必ずいたすものでございます」と言う。

身分が低い者だが、聖人の戒めにかなっている。鞠も、難しいところを蹴り出したあと、安心だと思うと、必ず落とすものだとか申すそうでございます。

(1)

答え　ア

①は、木に登った人に高いところにいるときは声をかけず、低いところにきて注意を与えた人物なので「高名の木登りといひしをのこ」です。②は、それを見ていて、「高名の木登りといひしをのこ」に質問をした人物なので「筆者」です。

(2)

答え　ウ

第一段落には筆者の体験が、第二段落には筆者の感想が述べられています。「高名の木登りといひしをのこ」の言葉と鞠を蹴る話から、筆者が伝えようとしていることは、「簡単だと思って油断すると失敗をするから、油断してはならない」ということだとわかります。

確認のテスト 6 古文②

本文 p.90～91

…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

最初の「人」は、そのあとに出てくる「あるじ」のことです。このように、**登場人物がわかりづらいところは、書き込んでおきましょう。**

「あるじ」の心情がわかる部分です。氷魚が少なくなったのをおかしいとは思いながらも、口に出さずにいました。しかし、僧の鼻から氷魚が出てきたのを見て、口に出さずにいられなかったのです。

これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒など勧めけるに、氷魚はじめて出で来たりければ、あるじ珍しく思ひて、もてなしけり。あるじ用の事ありて、内へ入りて、また出でたりけるに、この氷魚の殊の外に少なくなりたりければ、①あるじ、いかにと思へども、いふべきやうもなかりければ、物語しゐたりける程に、この僧の鼻より氷魚の一つふと出でたりければ、あるじあやしう覚えて、「その鼻より氷魚の出でたるは、いかなる事にか」といひければ、取りもあへず、「この比の氷魚は目鼻より降りさぶらふなるぞ」といひたりければ、②人皆「は」と笑ひけり。

（『宇治拾遺物語』より）

現代語訳

これも今は昔のことだが、ある僧が、人のもとへ行った。（主人は）酒などを勧めたが、氷魚が初めて出てきたので、主人は珍しく思って、客に出した。主人は用事があって、奥に入って、また出てきたところ、この氷魚がことのほかに少なくなっていたので、主人は、おかしいとは思ったが、口に出して言うようなことでもなかったので、話をしているうちに、この僧の鼻から氷魚が一つとつぜん出てきたので、主人はおかしいと思って、「その鼻から氷魚が出たのは、どういうことですか」と言うと、（僧は）すかさず、「この頃の氷魚は目鼻から降るのでございます」と言ったので、人はみな、「わっ」と笑った。

(1)
「あるじ」が見た内容をおさえましょう。――線①の直前に「この氷魚の殊の外に少なくなりたりければ」とあるのが見つかります。

答え ア

(2)
主語を補いながら、――線②の前までの話の展開をおさえましょう。氷魚が僧の鼻から出てきたのをおかしいと思った主人が、なぜ鼻から氷魚が出てきたのかと問うと、僧は、食べたとは言わず、ごまかしました。この僧の様子に、人々は笑ったのです。

答え エ

前書きに出てくる登場人物も必ずおさえておきましょう。

最後に、作者の感想がまとめられています。このように、最後にまとめが書かれていることが古文では多くあります。問題を解くのに直接かかわってくることが多いので、目立たせておくようにしましょう。

ある坊主は大変けちで、作った水飴を誰にも食べさせることはなかった。児にも、「これは食べると死んでしまうものだ」と言って食べさせなかった。これを食べたいと思っていた児は、坊主の外出中に、心ゆくまで水飴を食べ、その後、坊主の大事にしている水瓶を割った。

坊主帰りたりければ、この児さめほろと泣く。「何事に泣くぞ。」と問へば、「大事の御水瓶を、誤ちに打ち割りて候ふ時に、いかなる御勘当があらんずらんと、口惜しく覚えて、命生きてもよしなしと思ひて、人の食へば死ぬと仰せられ候ふ物を、一坏食へども死なず、二、三坏まで食べて候へども大方死なず。はては小袖に付け、髪に付けて侍れども、いまだ死に候はず。」

とぞ言ひける。飴は食はれて、水瓶は割られぬ。慳貪の坊主、得るところなし。児の知恵ゆゆしくこそ。学問の器量も、むげにはあらじかし。

（『沙石集』より）

現代語訳

坊主が帰ったところ、この児がさめざめと泣いている。「どうして泣いているのか。」と問うと、「大事な御水瓶を、誤って打ち割ってしまいましたときに、どれほどのお叱りがあるだろうかと、情けなく思われて、生きていても仕方がないと思って、人が食えば死ぬとおっしゃいましたものを、一杯食っても死なず、二、三杯まで食べましたがいっこうに死にません。最後には小袖につけ、髪にもつけましたが、いまだに死なないのです。」と言った。飴は食べられて、水瓶は割られた。けちな坊主は、得るものがない。この児の知恵はたいしたものだ。学問の才能も、悪くはないだろう。

(1)

答え ウ

坊主の問いかけに対する児の返答を手がかりに考えましょう。児は、「坊主の大事にしている水瓶を割ってしまったため、食べたら死ぬと言われているものを食べて死のうとした」と言っていますが、これは、もちろんうそです。このような言い訳を作って、けちな坊主が食べさせようとしなかった水飴を食べたのです。

(2)

答え ア

文章の最後で、作者が「学問の器量も、むげにはあらじかし」と述べていることに着目しましょう。作者は、児の知恵をほめて学問の才能も悪くないだろうと言っているのです。

確認のテスト 7 漢文

本文 p.92～93

〜…この文章でおさえておきたい部分
□…この文章で強調されている言葉

子曰、「吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲不踰矩。」

（『論語』より）

書き下し文

子曰く、「□。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず。」

現代語訳

先生がおっしゃることには、「私は十五歳で学問を志した。三十歳になって目標が定まった。四十歳になって迷うことがなくなった。五十歳になって天から与えられた使命を知った。六十歳になって人の言うことを素直に受け入れられるようになった。七十歳になって、心のままに行動しても人の道にはずれることがなくなった。」と。

この文章の登場人物は「子」だけです。「子曰」のあとで、「子」の言った言葉が最後まで続いています。『論語』は、孔子という人物の言行や、弟子たちとのやりとりが集められた本です。この文章に出てくる「子」は、孔子のことを指します。

書き下し文が空欄になっていて、そこに書き下し文を入れる問題があるときは、空欄に対応する部分を漢文の中から探しましょう。

(1)

答え ウ

□と対応するのは、訓読文の「吾十有五而志于学。」です。一・二点があるので、読む順番は「吾十有五学志」となります。これに合うように選択肢を選びます。「而」「于」は、ここでは読まない漢字です。

(2)

答え エ

「先生」が、自分が何歳の頃にどうであったかを話しています。これを話すには、その年齢を経験していなければなりません。先生の言葉の中に「七十」とあるので、少なくとも七十歳は過ぎています。

この漢文では、長江の流れ出始めたところと渡し場のあるところを比較しています。長江のような大きな川も、流れ出始めたところは小さいのだということを、渡し場のあるところと比較することで、**強調している**のです。

江出於岷山、其始出也、其源可以濫觴。及其至江之津、不放舟、不避風、則不可涉也。

（『荀子』より）

1 4 3 2

書き下し文

江の岷山より出づるに、其の始めて出づるや、其の源は以て觴を濫ぶべし。其の江の津に至るに及びては、舟を放たず、風を避けざれば、則ち渉るべからざるなり。

現代語訳

長江が岷山から流れ出るのに、流れ出る始まりのときは、その源はさかずきを浮かべるような小さな流れである。それが長江の渡し場のように川幅の広いところになると、舟を出して風を避けなければ、渡ることはできないようになる。

(1) A

書き下し文を参考にして考えてみましょう。助詞や助動詞は、書き下し文ではひらがなになっているので注意が必要です。「不」は「ざ」、「可」は「べ」と読みます。ここでは「也」は読んでいません。

答え 則不可涉也

(1) B

書き下し文や現代語訳も手がかりにしましょう。渡し場があるところになると、川幅が大きくなり、舟がなくては渡ることができないのです。

答え イ

(2)

長江の例を挙げて、大きな物事でもその始まりはとても小さいものだということを述べようとしているのです。

答え ア

確認のテスト 8 詩・短歌・俳句

本文 p.94～95

□…詩・短歌・俳句の展開をたどる手がかり
～…この詩・短歌・俳句でおさえておきたい部分

A　虫

虫が鳴いてる
いま　ないておかなければ
もう駄目だというふうに鳴いてる
しぜんと
涙をさそわれる

八木重吉

（『貧しき信徒』所収）

気持ちを表す表現に着目しましょう。作者は、命をふりしぼるようにして必死で鳴いている虫のすがたに感動し、「涙をさそわれ」ているのです。

(1) 「いま」鳴かないと、すぐに死んでしまうのです。
答え イ

(2) 虫の生命の輝きを見て、「しぜんと／涙をさそわれる」のです。
答え ア

B　いちはつの花咲きいでて我目には
今年ばかりの春ゆかんとす

正岡子規

いちはつの花は、晩春の四月・五月ごろに咲く花。病身の作者にとっては、最後の春が過ぎ去っていこうとしているのを感じているのです。

(3) 春が過ぎ去っていこうとしている、と感じています。
答え ウ

(4) 春が「今年ばかり」なのは、病気の作者には来年の春は迎えられないからです。
答え ウ

C　赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

短歌や俳句の読み取りでは、句の切れ目をまずはっきりさせましょう。そして、「ぞ」「や」「かな」「けり」などの切れ字、俳句では季語などを手がかりにして、そこに詠まれている内容を読み取りましょう。

(5) 「椿」が春の季語です。
答え ア